

令和4年度幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究事業

幼児教育関係者における好事例の



活用の在り方に関する調査研究

ICT の活用と子供の学びの見える化 報告書



令和5年3月

学校法人 鳳明学園 認定こども園 こもれびのもり幼稚園

目次

● I. はじめに	1
● II. 研究期間・目的・方法	
1. 研究期間	4
2. 目的	4
3. 方法	5
4. 倫理的配慮・肖像権について	6
● III. 保育シーン活用の結果	
1. 保育の「見える化」、「言語化」、「協働性」	
(1) 保育の見える化について	7
(2) 保育の言語化について	8
(3) 協働性について	8
(4) 研究の進め方	9
(5) 研究結果	12
2. 保育の環境構成	
(1) 環境構成とは	18
(2) 研究の進め方	18
(3) 研究結果	19
● IV. 総合考察	
1. 八戸市子ども支援センター 幼児教育アドバイザー 道合 康子	26
2. 八戸市子ども支援センター 幼児教育アドバイザー 堰合 雅弘	27
3. 八戸市教育委員会指導主事 竹井 亮	28
4. 八戸市立桔梗野小学校 幼保小連携研究委員 長谷部 幸恵 角田 歩美 澤田 実希望	29
5. 岩手県立大学 社会福祉学部 准教授 井上 孝之	30
6. 聖和学園短期大学 保育学科 准教授 上村 裕樹	33
● V. おわりに（研究から見えた課題と今後の展望）	
認定こども園こもれびのもり幼稚園 園長 田頭 初美	38
● IV. 名簿一覧	41

I はじめに

2018年（平成30年）3月、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3要領・指針が改訂され、幼稚園、保育所、認定こども園の共通事項として、環境を通じた教育・保育、乳幼児期からの連続した繋がりのある学び、小学校教育との接続などが明確に示された。

本園では、人格形成の基礎となる幼児教育の基本を適切に捉えるために、「子供にとっての最善の利益とは何か」を常に意識しながら乳幼児期の教育保育の在り方を模索している。

子供は、遊びの中から様々なことに興味関心を持ち、もっと知りたい、こんなこともやってみたいなどの意欲的な姿が見られるようになる。そこから探究心が生まれ、学びへと向かっていく。また、友だちや保育教諭等との相互作用のなかで信頼関係が構築されていく。

そのような子供の姿一つ一つに丁寧に向きあうことが保育力、教育力の高まりとなり、教育保育の質の向上につながるのではないかと考えている。

そこでICTを活用することにより子供の育ちの過程や姿を「見える化」し、事例のデータ蓄積をすることで、よりよい教育保育の質の向上の方策を探っていきたいと考え、本研究を行なうこととした。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領においては、「園児が自ら安心して身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、その活動が豊かに展開されるよう環境を整え、園児と共によりよい教育及び保育の環境を創造するよう努めるものとする。」と明記されている。

本園ではこれらを踏まえ、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の示す次の4つの事項を重視して、教育・保育活動を展開していきたいと考えている。

- (1) 乳幼児期は周囲への依存を基盤にしつつ自立に向かうものであることを考慮して、周囲との信頼関係に支えられた生活の中で、園児一人一人が安心感と信頼感をもっていろいろな活動に取り組む体験を十分に積み重ねられるようにすること。
- (2) 乳幼児期においては生命の保持は図られ安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、園児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。
- (3) 乳幼児期における自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章（※1）に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。
- (4) 乳幼児期における発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、園児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、園児一人一人の特性や発達の過程に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。

一人一人の発達の特性に合った教育保育を大切にして、子供が主体的かつ能動的に関わることが重要であることを認識して、子供たちを育てていきたい。

また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、育みたい資質・能力の3つの柱や3つの柱となる力を育てる方法を5つの分野に分けた5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）さらには、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（健康な心と体・自立心・協同性・道徳性、規律意識の芽生え・社会生活との関わり・思考力の芽生え・自然との関わり、生命尊重・数量や図形、標識や文字などへの関心、感覚・言葉による伝え合い・豊かな感性と表現）が示されているが、これらの視点は、幼児教育における最も根幹の部分であると同時に、子供一人一人に寄り添い、発達の連続性を踏まえ、経験したことを土台にして次のステップの成長発達、ひいては小学校教育以降の教育へと繋げていく足がかりとして重要であると捉えている。

さて、本園は、1964年（昭和39年）の幼稚園設立以来「子供たちのために作られた良い環境の中で、乳幼児期から始まる成長過程のどの時点においても、大切に望ましい経験を豊かにさせ、心身の発達を助長する。それとともに、自己肯定感を持ち、将来を幸せに生きていくための生きる力の基礎を培う」ことを基本理念として、幼児教育に邁進してきた。

1995年（平成7年）、少子化の進行に伴い子育て支援や働く母親のサポートができる体制の必要性から、国の「少子化対策特例交付金」により、園の敷地内に「子育て支援室」をオープンし、子育て家庭のサポート事業を開始。2011年（平成23年）には認定こども園に移行し、2015年（平成27年）、子ども・子育て支援新制度がスタートすると同時に幼保連携型認定こども園となり今日に至っている。

現在もなお変わらぬ基本理念の下、温かい愛情をもって一人一人を大切に育み、子供の幸せと、思いやり溢れる心の成長を願い続けている。

2000年（平成12年）を過ぎたころから働く母親が増え、預かり保育の園児が増加し、保育形態も多様化されてきた。それに伴い、早朝や夕方の保育ニーズが増え、コアタイムだけではない子どもの育ちの姿の共有や、保育者間の連携の必要性が増していった。

保育者間の連携や保護者に対する「保育の見える化」に努めるべく、2005年（平成17年）から写真画像をクラスごとにまとめた「今週のトピックス」を毎週紙ベースで発行した。

当時はデジタルカメラで撮影した写真をプリントアウトし、貼りつけてコメントを書き込むという、今思えばかなり非効率な方法だったように思う。

当時の「保育の見える化」促進は、斬新さはあれども職員の負担が増大するなど、保育者にとっては重い作業となっていたことは否めない。

その後、2016年（平成28年）からは、週に1度園のホームページ上の「ドキュメンテーションボックス」内で子供たちの経験したことや園生活の中での出来事、様々な表情などを保護者限定で配信している。

時を経て「保育の見える化」は試行錯誤を繰り返し進化しながら、今日の保育シーン評価システム（※2）に至る。

保育シーン評価システムにより、写真撮影をしたデータの蓄積からフォトカンファレンスやブラッシュアップ研修を行うことが容易になり、園内研修がよりリアルな現場に寄り添ったものになった。

子供は何を楽しみ、どんな思いがあるのか、保育シーンから見えてくるその子供の姿にはどのような思いや意図があるのか、そこから聞こえてくる子供の声やつぶやきに対して保育者がどのような言葉かけや環境的な配慮をしていくことが、より子供の育ちにつながっていくのか。カンファレンスを通して一人一人の育ちを丁寧に見つめ、より質の高い教育保育へとつなげていきたいと思う。

業務の多様化、複雑化、さらにはコロナ禍により、職員同士の話し合いの時間や交流がとりにくい中でも ICT を上手く活用し、効率化を図りながら一人一人の育ちに寄り添った保育の振り返りを行い、保育の省察にどう生かしていくことができるのか、また保育シーンを活用して、子供に関わるすべての人と人との繋がりの可能性を視野に入れながら、様々な実践の有効性を課題に研究に取り組みたいと考える。

※1 幼保連携型認定こども園の教育及び保育において育みたい資質・能力を園児の生活する姿から捉えたものであり、内容は、ねらいを達成するために指導する事項である。

※2 「保育シーン評価システム」について

保育シーン評価システムは、日々の保育で好事例と感じられた場面を撮影した写真に、その様子を解説した簡単なコメントを付加して記録する保育業務支援システムである。このシステムでは、コメントが付加された写真（保育シーン）がInstagram（Instagram：写真を投稿する SNS）のように整理される。園の保育者は、この保育シーンを閲覧しながら、質問や意見を投稿し、保育について語り合うことができる。また、子供の育ちを理解するために「シール機能」（「3つの視点」、「保育内容の5領域」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」）の項目で評価したり、クラスや季節ごとに保育シーンを検索したりすることもできる。さらに、クラウドで管理されることから、スマホやブラウザから利用できるため、外部アドバイザー等の参加も可能である。本研究では、この保育シーン評価システム ICT を調査研究に活用している。

Ⅱ. 研究期間・目的・方法

1. 研究期間

調査研究期間は、本研究「幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究」の助成を受けた日から、令和5年3月末日とするが、以下に示す研究は、助成終了後も継続し、教育保育の質の向上の為、取り組んでいく。

2. 目的

本研究では、次の4つの視点から目的の設定を行った。

① 保育者・保育者相互

- I. 日々の保育をスマートフォン（以下スマホと略す）で撮影し、記録をする。そこから保育に対する思いや面白さ、疑問等を感じることで、自分自身の保育観への気づき生まれ、保育の傾向が見えてくる。それとともに、他者の保育も見えることで、様々な気づきが見られ、共有、相互理解を深め、課題解決や研修に生かしていく。
- II. 保育者、給食職員や事務職員、通園バスの運転手、用務職員など、子供に関わるすべての職員がワンチームとして、子供の育ちを共有し、発達を支えることができ、課題の発見や改善を行いやすくする。
- III. 他園の保育者との交流、学びあう機会を持ち、自園の保育を振り返る等、園全体の保育に対する思いや園独自の文化を再認識する。

② 外部識者や教育アドバイザーとの協働

- I. 外部識者からのスーパーバイズや技術研修、教育アドバイザーからのコンサルテーションを受けることで、一人一人の保育の質の底上げを目指す。
- II. システム内にスーパーバイザーや教育委員会、幼児教育アドバイザーが参加し、幼児教育を中心とした様々な立場の方との連携で、スーパーバイズを受けることができる。
- III. 「保育シーン評価システム」を使用し、課題が見つけれ、見える化されていく為、よりリアルな子供の育ちを園内研修として取り入れることができる。

③ 小学校との連携・接続

- I. これまでも小学校との連携はあったものの、情報を共有し合い、密接な十分な関係性を構築することが難しかったが、保育シーン評価システムを取り入れる事により、八戸市教育委員会や八戸市の幼児教育アドバイザー、連携校の小学校の先生（幼保小連携推進委員）と現場に即した連携推進を図ることができ、幼児教育に理解が生まれるとともに、相互理解への仕組みが期待される。
- II. 子供の様子を写真を用いて伝えるなど保育の見える化を図ることで、より具体的に成長を伝えることができる。
- III. 幼児期の育ちの視点や、特に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についてそれぞれの捉えを認識しながら子供の今の姿を相互理解することが可能となる。

④ 保護者

- I. スマホを使用した保育シーンの共有により、保育が見える化される中で、保護者と保育者とが子供の育ちの姿を通して、会話をすることができるようになる。
- II. 成長が見える化されることで、子供の育ちをともに支えているという認識が生まれ、信頼関係が深まり、より安心して保育の姿や成長を見守ることができる。

3. 方法

調査、研究を進めるにあたって、職員が「保育の言語化・見える化協働性研究チーム」と「保育の環境構成研究チーム」の2つのチームに分かれて、常に情報共有を図りともに検証し合いながら、実践研究に取り組んだ。また、外部の識者や行政、小学校、そして保護者との連携を図りながら、保育シーンを活用することや関連するツールを用いることで、以下の3つの項目を実施してきた。

- ①保育者自身と他の保育者の写真を共有・閲覧し、子供の様子を見てコメントを付けたり、シール機能を活用し、保育評価を行う。それらを振り返り、記録した写真からみんなで考え、思いを話し合い、保育カンファレンスを行う。
- ②子供が育っていく過程で育みたい資質・能力をまとめた「3つの柱」や乳幼児期に3つの柱となる力を育てる方法を5つの分野にわけた「5領域」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」に分類したシール機能を活用し、他者の保育に対する様々な捉え方や保育観に触れることにより、自身の保育をブラッシュアップしていく。

- ③保育の記録を写真、文字で蓄積し、保育シーン評価システムを活用して、様々な視点から話し合い、より質の高い教育保育を目指す。

尚、本研究において実施した園内研修および委員会の開催は以下の表の通りである。

令和4年度 幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究園内研修の開催

日付			内容
10月	21日	第1回	顔合わせ・今後の予定について
10月	24日	第2回	園内研修（子供の育ちについての情報共有）
10月	27日	第3回	園内研修（シーンの振り返り①）
10月	28日	第4回	園内研修（シーンの振り返り②）
11月	11日	第5回	園内研修（シーンの振り返り③）
11月	16日	第6回	園内研修（フォトカンファレンス）
11月	24日	第7回	園内研修（ブラッシュアップ研修）
11月	28日	第8回	園内研修（シーンの振り返り④）
12月	8日	第9回	園内研修（各研究チームの発表・課題点について①）
12月	13日	第10回	園内研修（各研究チームの発表・課題点について②）
12月	16日	第11回	園内研修（フォトカンファレンス）
12月	23日	第12回	園内研修（ブラッシュアップ研修）
12月	27日	第13回	園内研修（フォトカンファレンス）
1月	13日	第14回	園内研修（報告書作成等についての内容打ち合わせ）
1月	27日	第15回	園内研修（報告書作成等についての内容打ち合わせ）
1月	31日	第16回	園内研修（報告書作成等についての内容打ち合わせ）
2月	6日	第17回	園内研修（報告書作成等についての内容打ち合わせ）
2月	15日	第18回	園内研修（フォトカンファレンス）

令和4年度 幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究委員会の開催

日時			内容
10月	24日	第1回	今後の研修について
10月	28日	第2回	今後の取り組み・研修についての進め方について
11月	24日	第3回	2チームの研究チームの進め方について
11月	28日	第4回	前回の研修を踏まえて・研究に向かう姿勢について
12月	16日	第5回	進捗状況の報告・今後の研究について
1月	4日	第6回	報告書原稿打ち合わせ①
1月	5日	第7回	報告書作成打ち合わせ②
1月	20日	第8回	報告書内容打ち合わせ③
1月	31日	第9回	報告書内容打ち合わせ④
2月	15日	第10回	報告書内容打ち合わせ⑤ 今後の課題について
2月	22日	第11回	報告書内容打ち合わせ⑥ 今後の課題について
3月	14日	第12回	研究報告会

4. 倫理的配慮・肖像権について

個人情報の取り扱いは、写真を扱うため特に倫理的配慮を重視し、保育の見える化を進めるにあたって、関係者に研究の主旨や内容、概要、方法等を丁寧に説明し、実践に関しての同意を得た。また、インターネット上の拡散も心配された為、利用には、IDとパスワードによりログインを制限するとともに、利用者を制限し、個人情報に配慮した。

また、撮影した写真に関しても、幼児及び保護者が望まない画像について掲載されないことがないように、掲載について保護者に承諾を得た上で取り扱うこととした。

Ⅲ・保育シーン活用の結果

本園では、これまで20年以上に渡り子供の様子をデジタルカメラで撮影し、ホームページ上やペーパーベースで保護者へ毎週配信してきた。本研究では、保育シーン評価システムを導入し、スマホ等にて保育シーンを撮影したのち、園内で共有し、子供の姿を「保育者・保育者相互」、「外部識者」、「保護者」、「小学校との連携・接続」の4つの視点から保育のICT化の可能性、特に保育の質の向上に向けた実践研究を行ってきた。ここではそれらの成果と課題を述べていきたい。

幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究に取り組むにあたって、保育現場にてICTの多様な活用を通して、子供の育ちを支えるという視点から保育シーンの活用について保育者現場スタッフ全員が「保育の見える化、言語化、協働性」と「保育の環境構成」の2つのチームに分かれ分析した。

1、保育の「見える化」、「言語化」、「協働性」

(1) 保育の見える化について

保育の見える化とは、保育シーンを写真や映像、画像データ等で記録し、共有を図り、残していくことである。保育を見える化することで、子供の成長を実感し、保育者間での情報の共有や保護者とのコミュニケーションをとるきっかけになる。

また、その日の保育活動の振り返りができることで、子供の育ちや成長が実感できる。



図1 保育シーンを撮影

(2) 保育の言語化について

保育の言語化とは、保育シーンを具体的に文字で表現していくことである。子供の育ちや姿、場面等をスマホで撮影し、そのデータ化された保育シーンを通して子供のつぶやきや思い、保育者のねらいや意図、場面について言語化しようとする。これまで記録として残しづらかった保育の具体的な内容や子供の遊びの姿が資料として蓄積されていく。また、保育シーンに対してスタッフ間でコメントをやりとりすることにより、保育の振り返りや見直し、省察のきっかけになる。



図2
画像から見てきた子供の姿を言語化

(3) 協働性について

保育者が保育シーンを通して自分のクラスの子供だけではなく、園全体の子供の姿を把握できることにより、子供の育ちを保育者が協力してともに支え合い、一緒に考えていくことが可能になる。

多様な保育の方法を理解し、認め合うことが保育者同士の相互理解を深めることとなり、協働的な質の高い保育が育まれる。

さらに、一人ひとりの良さや持ち味を活かし、互いに認め合うことができいく。さらに、保育者同士が互いに認め合い高め合っていくことで同僚性が育まれていく。



図3 幼児教育アドバイザーを交えた話し合い

(4) 研究の進め方

スマホで保育場面を撮影し、保育シーンを記録として蓄積した。

①スマホで保育シーンを撮影する。



集中の邪魔をしないように…

一人で頑張る姿を捉えて…



図4 子供の遊びのシーンを撮影

②保育シーン評価システムへ投稿する。



子供のつぶやきを振り返る



他クラスの保育も見える

図5 保育シーンの投稿

③職員間で投稿をみて、シール機能を使い、スタンプする。

□ **10の姿**

 ×0

 ×0

 ×0

 ×0

 ×0

 ×0

 ×0

 ×0

 ×0

 ×0

□ **5領域**

 ×0

 ×0

 ×0

 ×0

 ×0

□ **3つの柱**

 ×0

 ×0

 ×0

シール名一覧

10の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・健康な心と体 ・協同性 ・社会生活との関わり ・自然との関わり・生命尊重 ・言葉による伝え合い ・自立心 ・道徳性・規範意識の芽生え ・思考力の芽生え ・数量・図形・文字等への関心・感覚 ・豊かな感性と表現

5領域
健康 人間関係 環境 言葉 表現

3つの柱
知識及び技能の基礎 思考力・判断力・表現力の基礎 学びに向かう人間性等

幼稚園教育要領や幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針に基づいて職員一人一人が「10の姿」「5領域」「3つの柱」について、園内で研修会やカンファレンスを行い、職員間で学習の機会を設け理解した上で、現在の子供の活動の姿と照らし合わせながらシール機能を活用しスタンプしている。スタンプが活用されることを通して、保育者（自分・他保育者）のねらいや意図を考え、検証し、お互いの保育観を共有し合い学び合う機会となっている。

図6 シール機能の項目

④シーンをを見て感じたことや気づいたことをコメントする。

コメントを入力すると、新しいコメントが一番上に表記される。

次の事例は、「今しか踏めない霜柱（5歳児）」の保育者同士のコメントのやりとりである。

今しか踏めない霜柱



10の壁

5領域

3つの柱

【本文】

園児みんなで踏んだら楽しそう!!

ジャリジャリ…ガリガリ…カサカサ…バリバリ…踏む人(年齢)によって色々な音がする予感(*´艸`*)♥

4. りょうご先生 2022年12月08日 19時39分

3への返信

子ども達が踏んだ時のつぶやきはどんなだったかな？気になるところですね

もりもりの森にもたくさんの霜柱が出現！
何でできるのか？これは何なのか？
そよげさんの好奇心をくすぐる霜柱!!
踏んでみると「美味しそー！」と言う声が…
サクッと聞こえたようです。
みんなには何て聞こえるかな？

[返信](#)

3. みか先生 2022年12月08日 06時39分

子ども達が踏んだ時のつぶやきはどんなだったかな？気になるところですね

[返信](#)

2. みゆき先生（以上児フリー） 2022年12月07日 01時34分

1への返信

大人の私も感触、音が楽しかったです(2
厳しい冬ですが、今この時期にしか味わえない
体験をたくさんしたいですね！
さあ、どんな冬に出会えるかな？
ワクワクしますね♪

大人が楽しむ姿を見せるのも子どもたちに良い刺激になってるなと日々感じてます(*´皿`*)

[返信](#)

1. りょうご先生 2022年12月06日 23時03分

大人の私も感触、音が楽しかったです(2
厳しい冬ですが、今この時期にしか味わえない
体験をたくさんしたいですね！
さあ、どんな冬に出会えるかな？
ワクワクしますね♪

[返信](#)

図7 今しか踏めない霜柱

⑤園内研修

月に1回程度、園のスタッフ間でのカンファレンスと外部識者を交えての園内研修を行なった。



図8 投稿された保育シーンを用いた振り返り

(5) 研究結果

① 保育者・保育者相互

保育シーン評価システムを使用し始めた当初は、考えれば考えるほどいいものを見せたい、評価されるものを投稿したいという思いが強く、何を撮影したらいいのか分からなくなってしまった。

また、保育時間中に子供の姿をスマホで撮影することが難しく、撮影できても子供の自然な姿ではなくピースをしている写真や構えている写真になることも多々あった。他にも自分の撮影したシーンに自信がなく投稿してもいいのかという迷いもあった。保育経験年数が長い保育者ほどその葛藤は多く見られた。

本研究が始まり何度か投稿を繰り返していくことで、徐々に保育者間でコメントのやりとりが見られるようになり、以前まであった構えがなくなり、ありのままのシーンの投稿ができるようになった。保育者の意識が変わったことで共有したいシーンや子供の真剣な表情の場面など子供本来の姿の投稿が増えていった。今では、システムの内部が保育者同士の語り合いの場になり、意見を言える場、印象的なシーンを共有する場となっている。

保育経験の長い保育者や中堅の保育者、新卒の保育者などがそれぞれの観点からコメントをすることで、考えや思いを知るきっかけにもなり、互いに一人の保育者として、より多角的な保育の捉え方を知る場や語り合う場となっている。また、他の投稿にコメントす



図9
撮影を始めた頃はポーズ写真が多かった

る側の立場としても変化が見られるようになり、保育者自身の保育の捉え方、考え方、子供の内面、保育者の内面にコミットした子供を主体的に育む保育の大切さを重要視したコメントが増え、保育者同士がアドバイスし合い認め合う様子が見られるようになってきている。

これまで、保育の遊びの場面について保育者同士で話をすることはあったが、日常のケース会議等では記録や保育者の覚えている場面の範囲内での共有が主となっていた。スマホで撮影しシーンを残すことで「あの時のあの場面」がシステム内で共有され、いつでも遊びを振り返ることができるようになった。

他のクラスで盛り上がり、展開されている遊びの様子も保育シーンを通して知ったことで、いつしかその盛り上がり波及して同じテーマで他のクラス活動に取り入れることもできるようになる。

テーマ「光」といった事例を下に示す。

0歳児が保育室へ入る光への興味を示し、光の反射を目で追ったり、手で触ったりという姿があった。(図10)

4歳児クラス、子供の発話ややってみようという思いから色が加わりカラーセロファンなどを使った遊びへと展開していく。(図11)

2歳児クラスでは、冬になり外の光を浴びた色遊びのブームが起こっている。(図12)

このように園内で活動の共有の中から同じテーマでも年齢やその時の子供の興味や関心の矛先によって保育の展開、子供の対象への関わりの違いを実感することができた。

保育シーン評価システムで保育の場面が記録として蓄積されることにより、対象テーマがどのように展開され、子供にどんな反応や育ちの姿が見られるのかという保育者の興味もかき立てられる。保育シーン評価システムでは、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿(10の姿)」、「保育内容の5領域」、「育みたい資質・能力(3つの柱)」のシール機能がある。シール機能を活用することで、保育者それぞれの捉え方の違いも理解しながら、自分の保育の傾向や保育内容を意識するきっかけになる。保育者はコメントをするだけでなく、シール機能を積極的に活用し投稿することで、保育に対する共通言語化も図られている。



図10
0歳児「光への興味」



図11
4歳児「光から色へと興味の移り変



図12
2歳児「氷と雪の遊び」

② 外部識者

i. スーパーバイザー

スーパーバイザーが保育シーン評価システム内でのコメント及び園内研修でのリフレクションに加わっていることで専門的見地から多くのアドバイスや、教育保育要領に基づいた保育の視点を再確認でき、自身の保育を振り返るきっかけとなった。そのことにより保育の幅が広がっている。スーパーバイザーに日々の保育を見られることや自分の保育への評価が来ることに不安を感じ、最初は投稿を躊躇していた部分も否めないが、今では保育者同士では気づけない保育の視点や専門性について知ることができ、言葉の表現の仕方や子供に対する視点が変わってきたと感じる。



図 13
園内研修

スーパーバイザーからのリフレクション

ii. アドバイザー

八戸市子ども支援センターの幼児教育アドバイザーである元幼稚園園長や元小学校校長、さらに八戸市教育委員会指導主事等も保育シーン評価システムに参加している。園内研修で行った保育カンファレンスにおいて保育シーンから見えてくる子供の姿とそこから展開されていく保育の在り方についてアドバイスを受けている。

幼児教育アドバイザー等の参画により公的立場から幼児教育の重要性を小学校教育へとつなげる重要な役割を担ってもらう架け橋として、幼児教育への理解を学校教育へと橋渡しする必要性を共に考えていきたい。



図 14

保育シーンを見ながら子供の姿について
カンファレンス

③ 保護者

保護者への保育シーンの活用については模索しながら取り組みはじめたばかりである。

これまで毎月末には、手書きで子供の様子を文字ベースで伝えてきたが、本システムのドキュメンテーション機能により写真付きで様子を伝えられるようになり、保護者からも喜びのコメントがきている。

ありがとうございます！
写真付きで遊んでいる様子が知れてすごく
嬉しいです!!

お便りを見て保護者からの返信



図 15 保護者と共有するお便り①



日常のよう事を知ることができて嬉しいです
ありがとうございます。
頑張っている様子が家でも垣間見えます。
昨日夜、「二人がわかんないけど泣いちゃう」と静かに泣いていました。背伸びしながらみんなに追いつこうと頑張っているんだと感じます。
運動会楽しみにしています！最後なので、私が今から泣きそうです(笑)

お便りを見て保護者からの返信

図 16 保護者と共有するお便り②

保護者と共有することで園生活との連続性の保証を目指し、更なる研究を進めたい。

また、少数の保護者に依頼し保育シーンの取り組み検証をスタートした。

写真を公開することで保護者も園での子供の生活や姿を知ることができ、協力して子供の発達を共有しやすくなるという利点もあるが、その一方で、現在のシステムでは、個人のページ全てが保護者に公開される課題もあり、自由に保護者が参加できる状況にない。

④ 小学校との連携・接続

令和2年、コロナ禍によりこれまで行われていた幼小連携が行いづらくなり小学校入学前の子供の姿を共有する機会はなくなってしまった。

更には、小学校に実際に見学に行ったり、交流することもできなくなってしまった。子供はもちろん園側の不安も大きく、何とか園での生活と育ちを小学校につなげるべく写真を活用したアプローチカリキュラムをポスターにして持参した。(図 17)

本研究では、保育シーンの活用により連携推進を図ることを目指した。保育シーンを活用し、小学校との連携・接続に関して、本システムにより子供の姿をタイムリーに見てもらえるようになった。記録として残り、振り返ることができることで小学校入学後の子供の園での生活を通して、育ってきた姿を知るきっかけになるとともに、その後の情報共有もスムーズにいくよう期待している。

スタートしたばかりだが、これまで、口頭・文面のみで行っていた小学校入学前の情報交換の場で活用するだけでなく、園での活動の様子を日頃から知ることによって更なる連携が図られていくように思う。

また、保育シーンを活用し、保育の見える化を行うことで、幼児期の終わりまでに育て欲しい姿(10の姿)と小学校学習指導要領との関係性が見え易くなるのではと期待する。

小学校との連携・接続が今まで以上に丁寧に行われることにより、より実態に即した架け橋期のプログラム構築を目指していきたい。

こもれびのもり ようちえん

1月

①言葉による
伝え合い

①健康な
心と体

体育

雪って冷たいね! いろんな形に変身するんだね!!
雪って何を作ろうかな?
今日は雪の中からもつてみたい!!と興味が
生まれるよ。

3月

②自立心

②道徳性
・規範意識の
芽生え

道徳

幼稚園生活の集大成・様々な喜びの中からたくさん
のことを吸収し心も身体も大きくなったね☆
どんな姿でいたい?話し合いをしながら、
これまでの経験した姿を見てもらい、あんなに
気持ちよくなるよ!!

園での生活
全てが学び...

②言葉による
伝え合い

②道徳性
・規範意識の
芽生え

道徳

「いただきます」
今日はお友達と先生に
お礼を言おう!!
仲間と一緒に頑張ることも
成長できるね!

12月

③協調性

③異文化
理解と表現

音楽

歌ったり踊ったり...大勢の人の前で練習するの
ドキドキするけれど、友達と一緒に頑張るんだね!!
クラスで心を一つに盛り上げるって楽しいね!

10月

④道徳性
・規範意識の
芽生え

生活科

クッキー作り☆
ボクとママとパパで食べよう☆
おいしくなあれ! どんな形にしようかな?
家族の喜ぶ顔を思い浮かべながら楽しく食べよう☆
感じよう。

2月

④言葉による
伝え合い

④道徳性
・規範意識の
芽生え

国語

「いただきます」
今日はお友達と先生に
お礼を言おう!!
仲間と一緒に頑張ることも
成長できるね!

7月

⑤社会生活
との関わり

⑤言葉による
伝え合い

⑤道徳性
・規範意識の
芽生え

算数

知のて一人でお買い物、おれください!
銀色は何枚の紙幣がはいっているかな...
園外保育での経験は、自信もつさ一回りもまた回りも
大きく成長させてくれるよ。

8月

①健康な
心と体

②自然との
関わり・
生命尊重

生活科

この川に水を入れるとどんどん溢れていく!!
氷で凍らせた水
様々な気づきや発見が豊かな心を育てる一歩になるよ。

9月

③協調性

③言葉による
伝え合い

③道徳性
・規範意識の
芽生え

国語

「お決まりのしゅん」
「どうやって読むの?」
「山の会話が聞こえてくるよ!」
友達との関わりが聞こえてくるよ!
あることに気づけるよ!

5月

④自然との
関わり・
生命尊重

生活科

土のお仲間を育てて「大きくなりました」の魔法を
かけようよ! どんな姿になるのかな?
好奇心や探究心を持ち、野菜の成長を観察して
いきます。

6月

③協調性

③言葉による
伝え合い

③道徳性
・規範意識の
芽生え

算数

高く積み重ねてみよう!どんな形にしようかな?
氷で凍らせた水
様々な気づきや発見が豊かな心を育てる一歩になるよ。

4月

④道徳性
・規範意識の
芽生え

⑤社会生活
との関わり

道徳

幼稚園で一番大きい組になったよ!
園にいるお友達がいっぱいいるんだ。
長年組での関わりを通して優しい心が育っています。

幼稚園では、好奇心もはぐくみ
想像力を働かせ、考え方を育てています。

図 17 写真を活用したアプローチカリキュラム

2、保育の環境構成

(1) 環境構成とは

保育における環境構成とは、子供の心身の発達や成長に関わる「人的環境」、「物的環境」、「自然環境」、「社会的環境」として示されている。

子供が周囲にあるこれらの環境に自発的に関われるように、保育者には、子供の理解から保育環境を構成・再構成し、子供の育つ力を支えることが求められる。

そのため保育者は、日々の子供の姿から子供の思いを予想し、子供が興味や関心を持って取り組むために必要な道具や素材の準備を行う。また、子供は好奇心が刺激されると、さらに興味や関心をもって環境に関わるようになるため、体験を通して主体的・対話的で深い学びが実現できるように指導計画を作成していく。保育者は遊びの過程を写真や文章で記録し、それらを振り返りながら子供の姿の理解を深め、一人一人のよさや可能性などを把握していく。そ

して、遊びの展開や学びの深まりを予想して、環境の構成や一人一人の発達を見通した計画を立案し、実践を繰り返していく。これらの過程のなかで、保育環境は保育者の試行錯誤と保育の再構成が繰り返される。まさに、幼児期の教育は環境を通して行われている。

(2) 研究の進め方

保育者が子供の遊びや生活の様子を写真に記録する。その写真に、タイトルやエピソードを記入し「保育シーン」を作成する。この「保育シーン」は、作成した保育者が自ら「10の姿」や「5領域」等で写真をアセスメントし、同僚の保育者とSNSのようにコメントを交換しあったり、シールを貼りあったりすることで研究を進めていく。

これまででは記録として残したい保育場面があっても、写真を撮影し、コメントを書いた記録を残すことができなかった。そのため、他の保育者と保育場面を共有した振り返りが難しかった。保育者が、「保育シーン」の振り返りができることは、次の保育に活かそうとする意識を広げ、新たなシーンが生まれる。「保育シーン」を通して遊びが繋がり継続



図 18
畑に水やりをする姿



図 19
子どもが集めた園周辺の素材

し、展開していくためには、保育者が見通しをもって、方向性を明確にした環境の構成が必要となる。しかしながら、保育者にも環境構成の得意不得意のような偏りが見られる。そのため、「保育シーン」を通した保育者同士の学び合いから同僚性が芽生え、やがて保育を通した協働性が育まれ、環境構成の在り方に関する共通理解が深まるような保育の実践を行っていく。本研究では、保育の実践を通してそれらを検証していく。

(3) 研究結果

① 保育者・保育者相互

保育シーン評価システムを通して、子供の興味・関心や、一人一人の育ちがよく観察できるようになった。

保育シーンがデータとして残ることで、保育者間での会話のきっかけにも繋がっている。

その時の子供の姿について、なぜそのような行動をしたのか？どうしてそのような活動になったのか？など過程を知る、またはそのことについて振り返りながら保育を語ることができるようになった。



図 20
4 歳児 「日差しの暖かさに気づく」

このように保育シーンが蓄積されることで、子供の日々の成長がわかりやすくなり、保育者間で子供の姿を共有しやすくなった。図 20 は、4 歳児が保育室に差し込む太陽の暖かさに気づき、思わず寝転がったところである。図 21 は、0、1 歳児クラスで冬の太陽が保育室に射しこみ、カラーセロファンや風船などによる光や色に子供が興味を示し、その姿を保育者が思わずシーンに残したものである。



図 21
1 歳児 「冬の光を感じる」



図 22
保育者 「影の違いに気づいた！」

図 22 は、図 21 の 1 ヶ月後、同じ遊びをした際のシーンである。これは、園内研修にて子供の姿をフォトカンファレンスにて振り返り、保育者同士で話をしていくうちに、光の長さの違いに気づき、季節の変化を保育者間で共有するきっかけとなった。このように、シーンを記録として残していくことで、子供の成長発達の気づきだけでなく、保育者自身も自然環境の変化に気づくことができた。

保育シーンを通して、四季折々の子供の気づきや、その時しかない環境の構成を客観的に見る事が可能となった。今何が起きているのか、どんな遊びがブームなのかを職員間で情報共有し、時間を置かず活動に取り入れ、ブームを園全体で共有することができるようになった。

ICT を活用することにより、子供に関わる全ての職員が「ワンチーム」として子供一人一人の興味・関心から生まれる「やってみよう」という意欲探究心や「できた」など成長発達を支えるきっかけができる。

また、保育者の子供に向ける眼差しも変化してきた。これまでは、子供への直接的な援助が多かったが、子供の遊びの姿を俯瞰的に捉えることも増えた。さらに、同じように子供の姿を観察している他の保育者の姿にも気づき、子供理解の深化が感じられる。

保育シーンがデータとして記録されることで保育を冷静かつ第三者的に見ることができ、園内研修などで話し合い子供の怪我に繋がりやすい危険箇所なども共有でき、ヒューマンエラーの防止にも繋がっている。

② 外部識者

i. スーパーバイザー

スーパーバイザーから環境の構成について助言を受け、新しい視点に気づくことにより、子供の興味を引き出す環境をより整えられるようになった。助言を受ける前は気づかなかったことや考えつかなかった視点に意識して目を向けるようになった。次の保育の環境構成を工夫するようになってきたと同時に環境による子供の遊びの展開が楽しみになってきた。繰り返していくうちに保育者も子供の興味を引く環境の構成に気づけるようになってきた。日々の関わりを通し子供の主体的な遊びを育てていくことができるよう、さらに保育者同士の共通理解を図っていききたい。

ii. アドバイザー

本研究では、八戸市子ども支援センターの幼児教育アドバイザーや八戸市教育委員会の指導主事と共に園内研修を行ってきた。日常の子供の姿の理解を促進し、保育シーンを閲覧しながらコミュニケーションを取り合うことで保育への相互理解を持つきっかけとなった。

<p>15. inoue_kkuo 2023年01月31日 09時24分</p> <p>12への返信</p> <p>見るからにワクワクするシーンですね！ 椅子の下に見えるカブラがどのように繋がっていくのかなあ〜と想像してしまいました！ 2歳児では夏にこの椅子を重ねて遊んでいる様子を投稿しました。 以上児での遊び方はまた違った発想で面白いです！！ 私も混ぜたい！！</p> <p>初めから何でも思い通りにできるわけではないので、これまでの遊びの経験の積み重ねがこうしたダイナミックな遊びの展開に繋がるのでしょう。3歳未満児での触ったり重ねたりすることを経験して育っていくのでしょう。それまでの保育の積み重ねが大事ですね。カブラだけに。</p> <p>返信</p>	<p>16. uemura_kkuo 2023年01月31日 10時15分</p> <p>9への返信</p> <p>危険そうだからやらないという選択もありますが、子どもたちの楽しそうな雰囲気や安全に配慮し、見守ってみました！ 見守る、やらないの分かれ目が難しいですね。</p> <p>安全性の配慮と遊びのバランスは、見守りと元々の設備で解決していくというのが大切ですね。保育としての善護の部分はどうやって保障するか、月齢によっては、子どもと一緒に安全について感があることが出来たりもするので、一緒に子どもと環境を作っていくといいですね。</p> <p>返信</p>
--	---

図 23 スーパーバイザーとのやりとり

そよかぜタウン



【本文】

遅番の時間、大好きなカプラで遊んでいたそよかぜさん。それぞれが自分で思い思いに作っていたら…「繋げようよ！」と、お友達の一言で、みんなの作品を繋げ始めました。「先生～、町が出来た～！」と大はしゃぎ♪大作になり、お方付けに困った子達は、考えて看板を作り、次の日も続きを作るそうです！どんな町が出来たのか、楽しみだね♪

投稿者情報

施設 こもれびのもり幼稚園
作成者 りょうご先生
保存フォルダ
状態 公開
投稿日 2022年11月19日(土) 14時33分15秒

評価 編集 削除

図 24 5歳児 そよかぜタウン

③ 保護者

現在は保育シーンを公開していないが、今後は環境構成について日々子供の姿を発信していけたらと思い、その方法を模索中である。

子供の育ちの姿を保護者へ発信することで、保育者と保護者が子供の成長を共有し信頼関係の構築に繋がる。図 25 のような子供の毎月の様子をペーパーベースで渡し、共有する月末ドキュメンテーションにより保護者も保育理解をするきっかけ作りが期待できるようになる。そして、図 26 のような ICT を活用してのリモートでのレクリエーションでも実証されており、子供の成長の姿を共有することで、子育てへの喜びを感じていることが分かる。

積み木など片付けるとなくなってしまう遊びをシーンとして残すことで、その瞬間の好奇心旺盛で遊びに夢中になっている子供の姿を保護者へ伝え、共有するためにどう公開していくべきか検討していきたい。



新しいクラスにも慣れ、お友達もたくさんできたT君！今日は大好きな外遊びでの一コマ♪どこからか延びてきた木を見つけ、登ろうとするT君。バランスをとりユラユラ揺れる木を楽しんでいました！楽しくていつもお友達に囲まれています！

新しい環境の中にお友達と楽しく遊べる姿を保護者へ発信することで、保護者も安心して子育てができます。おかげで幼稚園へ行くのがとても楽しくなりました。ありがとうございます。

図 25
保護者と共有するお便りドキュメンテーション

保護者からのコメント



家庭から親子で参加

園とは違った子供の姿…

図 26
親子レクリエーションにて ICT の活動

④ 小学校との接続

小学校との連携・接続は、スタートしたばかりだが、園における保育の様子を見て、実際の子供の姿を共有することができるのではと期待している。

子供が何に興味を持って過ごし、どのような保育活動をしてきたのか、主体性を発揮して過ごす様子を知ってもらい、小学校教育との連続性への理解を深め今後とも連携、協力するツールとして活用していきたい。子供が育つ姿を記録していくことができる、このシステムを通して主体的に学ぶ姿を、幼児教育ではいかに大切にしながら子供たちを育てているのかを共有し、一人一人の成長発達を共通理解し、大事に育てていけることを願うものである。



図 27 5歳児「小学校での学校探検」

わくわく、ドキドキ1年生☆



【本文】

今日は楽しみにしていた、小学校校舎見学。まるで1年生になった気分で、椅子に座ったり、様々な教室を見学。小学校って本の部屋や音楽室など色々な部屋があるんだね！色々発見！学校って楽しそう！ワクワク目をキラキラさせていた子供たち。校長先生や教頭先生が、案内してくださり、小学校ってどんなところかを教えてくださいました。朝の登校時間を聞いて驚く子ども、、、起きれるかなあ、、、これから早起きががんばるぞ！

今から特訓だあと気合十分の子もいました！

投稿者情報

施設 こもれびのもり幼稚園
作成者 みか先生
保存フォルダ
状態 公開

図 28 5歳児「わくわくドキドキ学校見学」

IV 総合考察

1、 八戸市子ども支援センター 幼児教育アドバイザー 道合 康子氏

幼児教育は、人格形成の基礎となる土台づくりを担っており、各園の創意工夫を生かした質の高い教育の実践が求められている。

幼児教育施設では、環境を通して行う教育を基本としている。このことから、環境が子どもの発達にどのような意味があるのか、という環境の教育的価値について研究を積み重ね、ICTなどの特性や使用方法を考慮したうえで幼児期の直接的、具体的な体験を豊かにする工夫をしながら、教育内容や指導方法の改善を図っている。

園内研修においては、子どもの姿を画像から取り込んだ保育シーンを基に、「3つの柱」、「5領域」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を互いに応答しながら学びを深めることで、保育教諭の質の向上につながっていると感じている。

ICTを活用することで、子どもの育ちの過程においてその時々に見せる姿を言語化し、保育教諭間で様々な視点から協働的に考えることで、幼児教育が新たな可視化につながっていくのではないかと考える。

今後、日常的な活動を可視化することにより、園と保護者が子どもの育ちを共有し信頼関係が深まっていくことも期待するところである。

文責：八戸市子ども支援センター 幼児教育アドバイザー 道合 康子

2、八戸市子ども支援センター 幼児教育アドバイザー 堰合 雅弘氏

幼保の学びと小学校の学びとの大きな違いは、「遊びや生活を通して総合的に学ぶ」ところと「各教科等の学習内容を系統的に学ぶ」というところにある。今まで、「幼保小連携推進事業」を行っていく中で、この「遊びや生活を通して総合的に学ぶ」ことについて、小学校の教職員が具体的なイメージを持ちにくい傾向があった。

今回、ICTの活用を進めていくことで、子どもの活動を分類・蓄積することが容易となった。このデータを小学校の教職員も活用していくことで、「遊びや生活を通して総合的に学ぶ」ことや「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等について具体的なイメージを持ちやすくなる。また、小学校には様々な園から子どもたちが入学してくるが、このコロナ禍の中ですべての園を小学校の教職員が訪問し、園の教育方針や特色を理解していくことは容易なことではない。しかし、こうしたICTの活用によってそれらのことも容易となってくると考える。ICTの活用で、今まで以上に密接にかつ効率的に相互理解を深めながら「幼保小連携推進事業」を展開できるようになり、そのことで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と小学校の各教科等の活動や育みたい資質・能力等とのつながりを考えた、より効果的な架け橋期のカリキュラムを構築し、実践していけるものとする。

文責：八戸市子ども支援センター 幼児教育アドバイザー 堰合 雅弘

3、 八戸市教育委員会指導主事 竹井 亮氏

八戸市教育委員会では、幼保小の円滑な接続を図るため、「幼保小連携推進事業」を実施している。幼児教育施設及び小学校の教職員が、子どもの発達や互いの教育内容についての連携を深め、互いに理解・尊重し合って幼児児童の学びの連続性を図ることを目的として、合同研修会の開催や幼児児童及び教職員同士の交流、小学校入学予定幼児の全保護者向けパンフレットの配布等を行っている。

令和4年度からは、幼児教育施設及び小学校の教職員による保育・教育の相互参観を推奨している。保育・教育の様子を直接参観することで、互いの教育内容をより一層理解し、具体的な子どもの姿を基にした情報交換を通して、幼児期と児童期との円滑な接続を目的としている。しかしながらこの取組は、こもれびのもり幼稚園をはじめ、一部での実施は見られるが、多くの小学校区では実施できていない現状である。そこには、いくつかの要因が考えられる。

要因の一つとして挙げられるのは、新型コロナウイルス感染症の影響である。これまで本事業においては、幼児が小学校を訪問して行事に参加したり、低学年児童と交流したりする「オープンスクール」を設定していた。教職員においても、「地区会」として互いに行き来し交流する機会があった。しかし、コロナ禍となり、幼児児童及び教職員同士の交流は中止となることが多く、直接訪問が必要な相互参観についても、感染対策のため未実施となっていることが考えられる。

このような現状において、解決の糸口となるのが ICT の活用である。幼児教育施設が、ICT を活用し日常の保育の様子を画像等で発信しコメントを加えることで、小学校は園への訪問が叶わなくても保育の様子を知ることができる。画像やコメント等を通して実際の保育や幼児の活動の様子を知り、園ではどのような考えのもと保育を行っているのか、幼児はどのように活動し成長しているのかを把握することで、幼児教育の理解につながり、現場に即した幼保小の連携推進とすることができる。このことは、相互参観のねらいである、教育内容の一層の理解、幼児期と児童期との円滑な接続にも寄与するものであり、直接の訪問はハードルが高い現状では、小学校としてもアプローチしやすい取組であろう。

今後は、幼児教育施設が発信した画像やコメントに加えて、小学校がホームページ等で発信しているブログ等も活用して教職員同士で情報交換するという方法も考えられる。その際、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に照らし合わせたり、小学校の学習とのつながりについて意見交流したりすることで、互いに理解・尊重し合って幼児児童の学びの連続性がより一層図られることに期待したい。

文責：八戸市教育委員会 教育指導課 竹井 亮

4、 八戸市立桔梗野小学校 幼保小連携研究委員 長谷部 幸恵氏
角 田 歩美氏
澤 田 実希氏

今年度、連携園の先生方と本校参観日や研修講座を活用し定期的に交流の場を設けた。情報交換や相互参観で互いの指導の方針や教育内容を理解したり、幼児児童の実態を把握したり出来たことにより、日常の指導や支援に活かすことが出来ている。また、「こんなことができそう」、「こんなことをやってみたい」等の意見交流をもつことによって、スムーズな接続につながると感じている。

接続期カリキュラムについては、年度当初に互いのカリキュラムを共有したことで、学びの連続性を意識することができ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」を理解し保育の様子を参観し、小学校での学びについて改めて考えることができています。

今後の研究の課題として、コロナ禍で、日々状況が変化する中、交流・情報交換を行う時期・時間の設定が難しいので、方法等を工夫し、教職員同士、幼児児童の交流の機会を設定していく必要がある。

互いのカリキュラムを見合い、共通項やつながりについて考える等、接続期カリキュラムの具体性に迫っていく必要がある為、互いに連携し具体的に計画し、実施していきたい。

文責：八戸市立桔梗野小学校 幼保小連携研究委員会
長谷部 幸恵 澤田 実希 角田 歩美

本研究は、幼児教育関係者における好事例の活用に関する調査研究である。従来、幼児教育は、子供の育ちと学びの理解を下に、保育者が援助を行うことが基本的とされている。一方で、保育施設の ICT 化は、保育業務支援システムによる保育業務の効率化と省力化が導入の主な理由となっている。本研究では、幼児教育の基本が十分に理解されたうえで、ICT を活用した保育実践が丁寧に行われている。

そこで本稿では、はじめに ICT を活用した「保育シーン」による、「保育の『見える化』、『言語化』、『協働性』」と「保育の環境構成」の2つのテーマについて考察を試みる。さらに、保育中の写真撮影の意味について検討し、今後の ICT による記録の蓄積と活用について考察を行う。

1 保育の「見える化」、「言語化」、「協働性」

保育者は日々の子供の遊びの姿をスマホ等で撮影し「保育シーン」を作成する。その「保育シーン」について、スマホで遊びの価値を語り合い、幼児理解を深めている。さらにそこから、次の保育の計画や改善（環境の再構成）の手立てについての ICT 活用を探っているのである。

「保育シーン」によって、遊びの場面を見ていない保育者も、子供の経験を知ることができるため、園内の幼児理解が広がっていく。さらに、複数の保育者がコメント（対話への参加）することで、「保育シーン」を作成した保育者自身が新たな気づきを得ることができる。多くのコメント（対話）は、子供にとって最善の利益となる保育の在り方を探す視座を与えてくれる。このことは、保育者による写真撮影（見える化）、写真へのコメント力（言語化）、複数の保育者でのコメントによる、より良い保育実践への模索が職場の「協働性」を育むこととなり、保育者の保育力や保育の質の向上に繋げることができている。

2 保育の環境構成

本研究では、保育の環境を次の4つで捉えている。それは、「人的環境」、「物的環境」、「自然環境」、「社会的環境」である。これらの視点で「保育シーン」捉え直すと、いつもはあまり気に留めなかった子どもの遊びの姿から、大切な気づきを得ることができる。日々の保育で営まれる子どもの遊びの瞬間を1コマの写真で見返すと、子ども一人一人と保育者の関わりをよく観察するようになり、子どもの成長する姿の理解が深まっている。また、保育者との言葉のやり取りを想像、周囲に置かれている道具や素材が適切であった

か、映り込んでいる他の遊具の活用意図等、写真の遊びやそれ以外にも、広く関心が持たれるようになっていく。

さらに、季節の気づきを表現する保育者の言葉や、その時期ならではの遊びを取り入れることで、季節にふさわしい遊びが展開できる環境の構成への工夫に繋がっている。これらの保育シーンが蓄積されることで、保育場面の観察が園内研修や危険箇所の気づきへと広がっている。

このように、「保育の『見える化』、『言語化』、『協働性』」と「保育の環境構成」の2つのテーマでの検討により、「保育シーン」の蓄積により有用な活用ができることは明らかになった。「保育シーン」は子どもの記録のみならず、保育者、保護者、子ども本人が理解し認め合い、支えながら成長を扶ける保育業務支援システムである。そのため、今後は、保護者や家庭との「保育シーン」の共有や小学校との連携・接続での有効な活用を探っていく必要がある。

3 「保育シーン」の作成・蓄積と活用

最後に、保育中の写真撮影について考える。本研究では、保育者が保育中にスマホで子どもの遊ぶ姿を撮影することを求めている。保育者は写真撮影のために子供の側にいるのではなく、子供への支援・援助のために寄り添っているのである。それなのに、保育の途中で写真撮影を依頼されるのである。この時点で、保育者には自らの保育の、どの場面を切り取るかが求められており、その写真に同僚によるコメントの対象になると意識すればなかなか保育には専念できず、写真撮影自体が負担に感じる保育者がいるかもしれない。それは、「保育者は子供の予想される姿を下に環境を構成し、必要な援助を行う」ことを十分に理解しているからであろう。本来は「子供の姿」は予想されていなければならない。しかし、保育者の予想など当てにならず、子供はその時の自分の意思で遊びに興ずるため、予想を立てることは必要であっても、そのとおりにはないことも承知している。

つまり、保育の場面でどのような写真を撮影し、コメントを残すかといった作業は、日常の保育の中に常に「省察」と「対話」を求めることである。この作業はまさに、保育力・保育の質の向上へのプロセスが働く契機となり、「保育者がスマホで記録すること＝保育力・保育の質の向上へのスタート」となるであろう。保育中の保育者自身の振り返りは、「行為の中の省察 (Reflection - in - action)」そのものであり、保育者がスマホを持つことだけでも意味ある活動であり、省察的实践者への歩みとも捉えられる。

本研究のように、「保育シーン」を作成し、日々の「保育シーン」をデータとして蓄積することは、子供一人一人の育つ姿を理解し、育つ力を支える上で大切な知見を得ることとなる。

これまでも保育者間での保育に関しての語り合いは行われてきたことが、本研究開始時の保育者及び施設長などとの個別的な話から伺うことができた。しかしながら、これは保育場面を客観的に捉えて、共通のイメージの下で、相互の理解を齟齬なく具体的に照らし合わせながら話し合うというものではなく、保育場面の捉えにおいて、それぞれの視点や視座を重ね合わせながら行うというよりも先程の場面の先程の内容といった大きなくくりの中で保育について、話し合うことが多い様子であった。そのため、場面のどの時点か、時間経過に関することや子どもの具体的な対象となる集団や個人、姿や様子等の具体的に捉えられた場面ということに関して、極端に大きなズレの中で話が行われるというものではないが、些細なズレや齟齬が起きた状態で話合われてしまうことがあり、相互の認識や理解が重ならないまま進んでしまうこともあった。また、具体的に場面の環境を構成する要素について、振り返るということは、当然のことながら弱いものであり、保育者がその場面について、保育室から離れていたり、他クラスでの出来事であったり、子どもへの個別的な関わりを行っている場合、そもそも場面検証が起こりにくいという課題も浮かんできた。

これは、本研究において、園内研修が重ねられていく中で、保育者から示されたことであるが、例えば「同じ場面を同じように見ながら話し合うことで、どの点を捉えて話をしようとしているか、また焦点にあてているのかが理解しやすかった。自分ではあまり気にしなかったことが、必要なことであったり、より注意深く見たほうが良かったり、課題として確認したほうが良いかもしれないことなどに気づくことができた。」「自分はこう思っているけど、他の先生方の違った意見がそれぞれ聞けて、違う視点で写真を見ていることがわかった」「未満児の子どもそれぞれによって関わり方が違うため、声掛けや接し方などその先生の関わり方など個別の視点から参考にできることが多い」「そもそも年齢が異なることで、声掛けの頻度や言葉がけの内容が異なるものであり、該当しないクラスの先生の意見を聞くことがその具体的な違いが理解できる」「担任の先生はより深い視点でその子どものことを見ていて、言語的に示す場合にも場面を補足できる言葉が多い」と感じた。

たとえその場面を見ていなかったとしても、「自分のクラスの子どもであれば、予測してこんな風にしようとしている、こういうことをこの子なら言っている、同じシーンでも子どもによって想像したり浮かび上がるイメージが変わる」など、保育シーンを可視化し、振り返ることで、他保育者の視点から気づくことや得ること、学ぶこと、自らの保育を省みることが深められている様子が示された。

保育者間での振り返りである園内研修を通して、保育のシーンを可視化し検証すること、蓄積され可視化されたシーンを自らの保育の質の向上のために活用しようとするのが、保育者自らが気づいた様子が伺える。

6、聖和学園大学 保育学科 准教授 上村 裕樹氏

保育ニーズが複雑化、多様化する現在において、子供を取りまく環境が変化しており、保育者に求められる業務量や保育施設に期待される役割が年々大きくなってきていること、保育者不足に伴う一人あたりの業務負担の増加、保育者間の協力や連携、協同の課題などに起因していることが確認されている。

近年、我が国では、保育の評価や実践の記録としてイタリアのレッジョ・エミリアから拡大した「保育ドキュメンテーション」（子供が夢中になっている瞬間、子供が遊びの中で経験している過程など）の作成や保育実践を「ポートフォリオ」として保存し、保育内容の可視化に向けた取り組みが注目されている。保育内容の可視化は、保育を充実させ、保育者の学び合いによる同僚性や専門性の育成、保護者への理解推進や子育て支援に有効である。保育実践を可視化することは、保育を振り返り検証する上で重要であり、自らの保育実践を振り返り省察する力、保育中の保育者自身の振り返りは、D. ショーンの示す反省的实践家としての姿であり、保育者の保育力の向上や保育の質の向上を図ることへとつながると考える。保育の可視化は、保育を充実させ、保育者の学び合いによる同僚性や専門性の育成、保護者への理解推進や子育て支援等にも有効である。

また、園内での学び合いとして、保育の質の向上を目的とした園内研修については、これまで様々な実践が行われている。特に近年では、全ての保育者が主体的に参加し、意見を出し合って新たな気づきを生み出す研修の重要性が指摘されており、研修を有効に行うための方法やファシリテーションも多い。

(1) システム仕様

使用したシステムは、保育シーン評価のためのクラウドシステムであり、インターネット上のクラウドで管理されるため、インターネット接続環境が必要であり、園における園内の無線 LAN に端末を繋いで実証した。シーンの投稿は、アップロードされた写真を園専用のブラウザにて参照し、クラスや保育活動の区分、タイトル、コメント等をテキストとして記載し、シーン（活動記事）として投稿し、保育の記録を日々蓄積していくものである。保育者により、投稿されたシーンは、グループとして園内において公開されており、投稿者はもちろんのこと、同グループ内の他の保育者もブラウザにて投稿の閲覧が可能である。

システムの具体的な仕様は、以下の通りである。

- ①保育者が、保育現場における子供の生活する姿を写真に撮影する。その時の状況について、ICT 機器を使って入力する。写真データは、場所や時間、活動、名前など様々な情報と共に記録することができる。
- ②使用される写真データは、全てサーバーに送信され、安全に一括管理される。
- ③保育シーン評価システムでのシーン（活動記事）の投稿により、写真データには、撮影時の子供の様子や保育者のコメントも同時に表示されるため、写真の状況が理解しやすく、自分が保育を振り返り学ぶのみならず、同僚の保育からも学ぶことが可能となる。保育者間での評価や講評が業務におけるそれぞれの園の一定のルールに基づき行われ、優れた保育実践には評価も与えられ、モチベーション向上が期待される。またその反対に、自らの保育活動に対して悩みながら取り組む保育に対しても同僚からの的確なアドバイス（スーパーバイズ）が期待できる。さらに、外部識者による伴走的なコンサルテーションとスーパーバイズが行われることで、より質の高い保育が保障される。これらの写真データを使った対話型の保育カンファレンスや園内研修は、全員が一同に会すること、すなわち whole system であることが重要とされるが、保育 ICT の活用により、従来のように一同に会し活用可能であることはもちろんのこと、各自がそれぞれ都合のつく時間帯で参加できるようになる。
- ④保育シーン評価システムにより、保育者のコメントやその写真が表す「3つの柱」や「5領域」、「10の姿」などをレイアウトした保育シーンや、これまでに投稿された記録を用いた保育ドキュメンテーションが生成される。
- ⑤保育シーン評価システムにより、保育施設での生活を子供一人一人に分類しまとめていくことにより、子供一人一人の個別の育ちの記録としてポートフォリオの作成が可能となる。

(2) システム・フロー

システム・フローは、保育活動を写真として撮影し、その写真を活動記事（シーン）としてウェブ（ブラウザ）へ、保育者（ユーザー）が ID とパスワードによって認証し、セキュリティ構築されたサイトへ投稿するシステムを構築した。投稿されたシーンは、投稿者が属し、ID とパスワードを有するユーザーである保育施設の同僚の保育者は閲覧できる。撮影した写真は、ID とパスワードでの認証が必要とされるサーバーにアップロードし、専用フォルダに保存される。ユーザーは、保存された写真を園専用のブラウザ内で選択し、タイトルや本文、コメントといったテキストを入力し、シーンとして投稿する。投稿されたシーンは、園内において公開されており、常時の閲覧が可能である。

アップロードされた写真を園専用のブラウザにて参照し、クラスや保育活動の区分、タイトル、コメント等をテキストとして記載し、シーン（活動記事）として投稿し、保育の記録を日々蓄積していくこととした。タイトルは自由に編集が可能であるが、シーンの投稿のための写真を選定し、クラスや区分を選択した時点で、それらの項目と撮影日時が自動的に抽出され、タイトルが生成（例えば「〇〇〇〇年〇月〇日 3 歳児外遊び」など）される。これは、保育者がシーンを作成し投稿するためのテキストの入力にかかる手続きを簡略化することで、自身の保育を公開していくことへのハードルを下げためである。保育者は、保育施設が ICT 化されても、PC の扱いや情報機器には慎重であり、その操作に対して苦手意識を持っていることが多い。保育者が負担なく、ICT 機器に触れ、シーンの投稿システムへのアクセスを増やすことが可能となる。

また、投稿されたシーンについて、シール機能やコメント機能を付与し、投稿者本人のみならず、同僚の保育者が投稿された内容について、評価できるようにし、スーパーバイズやカンファレンスとしての役割をもたせた。互いの保育を知るだけでなく、同僚からのコメントにより、自らの保育を振り返り、より質の高い保育へと省察的に取り組めることが可能である。

これらの撮影から投稿までの一連の機能を全てスマートフォンでも実施可能であり、スマートフォンは現在ほとんどの方が持っている情報機器であるため、ICT 機器への苦手意識を感じやすい保育者にとっても、その苦手意識は低くフレンドリーな機器であるといえる。

また、日常的に触れている情報機器であるため、写真撮影やブラウザの活用も容易であり、テキストの入力なども PC より抵抗感が低い。そして、入力に際しても日常的に自分の得意な入力方法があるため、キーボードだけではなく、フリックや音声での入力なども活用している。そのため、これらの背景を踏まえると、保育 ICT システムの利用の拡大を図りやすい。

(3) シール機能・コメント機能

システムにおいて、保育力の向上と保育の質の向上に関して欠かすことのできない研修や自己研鑽として、シール機能とコメント機能は特に重要な役割を担う。

シール機能とは、投稿シーンの保育について、写真や記事の投稿の際に、その保育の内容に応じて、クラスや場所、年齢、季節といった基本情報に加えて、「5領域」や「3つの柱」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」から、投稿者がそれぞれにおいて、最も説明として適していると考えられるシールを選択し、自らの投稿における保育者のねらいや意図などを示すことが可能である。シールは、各1枚ずつ選択する事が可能であり、複数と同時に選択し示す事ができる。これは、保育を保育者自身がどのように捉えているか、どのようなねらいをもつものか、そこに込められた意図は何かなどを投稿の際より具体的にかつ説明的に考えることができると共に、他の保育者が閲覧し共有する際に、そこに込められた保育のねらいや意図について、直感的により理解しやすいといえる。

また、このシールは、投稿者だけではなく、閲覧者もそれぞれ全てのシールを1枚ずつ選択することが可能である。閲覧者が投稿について、自らが考える「5領域」や「3つの柱」、「10の姿」について示すことで、蓄積されるシールから、投稿者や閲覧者の視点や解釈の異同について確認することができ、保育の振り返りについて、視点の共有が可能となる。

コメント機能とは、投稿されたシーンについて、閲覧者はコメントを投稿することができる。投稿者は、シーン投稿の際、保育に込められた意図や、子供の姿と保育の場面に対する保育者としての解釈や説明を記事として投稿する事となるが、コメントでは、閲覧者が感想や気付きについて自らの考えを示すことはもちろんのこと、投稿者に対しての疑問や質問も行うことが可能となる。投稿されたコメントは、リプライすることが可能であり、そこにリプライにより回答が示された際には、コメント投稿者に対して、リプライの反応があったことに関して通知がなされる。このコメントの機能は、閲覧者からのスーパーバイズやコンサルテーションなど、キャリア形成の観点からの役割を担うことが期待できる。

(4) 保育実践の評価

保育者同士の会話を通じた情報の共有や出来事の共有と振り返りは、日常的に行われており、特別なことではなく、子供を保育する上で当然と捉えている協働的な取り組みの姿であり、日常的にはほぼ毎日行われることが、保育者にとって当然のこととなっている。

しかし、情報を共有し話し合う保育者を確認すると、ある種限定的で固定化されており、その大部分は、同じクラスや同じ子供を担当している複数担任での保育者間や業務において重なりのある同僚との間で行われていることが多い。つまり、保育室が離れており日常的にあまり重なる機会が多くない場合や、幼児クラスと未満児クラスのように、保育活動があまり重なる機会が無い場合には、保育者同士が細かく情報を共有するやり取りを行う機会がこれまでは、そのような意図を持って対話的な手法等を用いて相互の情報共有の機会として実施されるよう設定された園内研修やカンファレンスの機会以外には、あまり存在していなかった。

そのため、システムの活用を通じた情報共有は、保育が文字化され、蓄積されていくことで、いつでもアクセスが可能であり、こうした日常にはあまり多くない情報共有の機会がオンラインの中において構築され、他クラスや他保育者の保育について、保育者同士での共有が図られていることは、その背景とともに知る機会となっている。これにより、従来、保育カンファレンスや園内研修等以外であまり共有することが容易でなかった、日々の保育活動の情報に関して、保育者間での情報共有が可能となる。

また、公開されている同僚の保育活動をモデルとして、自身の保育活動に取り入れていくことや規模の小さな自主的なカンファレンスや協働的な学び合いへとつなげることが可能となり、そうした主体的な活動が、保育者間において始まっている。

保育のシーンの投稿における共有やスーパーバイズ、リフレクション等の複層的な視点からの学びの履歴が視覚的に認識しやすく、園外からのスーパーバイズやコンサルテーションが促進される。これは、保育者にとっての研修となり、時間や場所の物理的条件を問わずに、保育者自身に取り組める時間を活用し、参与することが可能となった。

互いの保育に対して、応答し学び合う関係性が構築されることで、保育者自身が自らの保育を振り返り、保育に関して検証することが始まる。

また、自らの保育の改善に向けて再構築するための取り組みについて、子供の日々の活動や姿を日常的にみつめ、子供を保育の中心として捉えた子供主体の保育がこれまで以上に進められている。

本研究からは、保育に対する確実な変化が表れ確認できていることについて報告されており、ポジティブな変化が認められた。

V おわりに（研究から見えた課題と今後の展望）

全国的に教育・保育現場での ICT 化は進みつつあり、その趣旨は保育業務の負担軽減という視座から推進が図られている。

保育業務の負担軽減のための ICT 化は「業務内容の見直し」、「業務効率化」、「業務量負担の軽減」、「保育記録等作成時間の確保」、「ノンコンタクトタイムの創出」といった、働く環境の改善と業務に対しての効率化に主眼が置かれているように感じていた。

確かに、保育業務軽減により子供と向き合う時間の確保策は図られていくと考えるが、ともすれば ICT 化の推進によって、人と人との関係性の希薄化を招くなど、情報技術に寄り掛かり、ヒューマンエラーが起きることや、子どもの教育・保育の視点の幅が狭まってしまうというリスクも考えられる。さらに言えばデジタルな視点にならざるを得ずドライなイメージがあるのもまた否めない。

一方では、コロナ禍における保育 ICT 化はどんどん進み、園に居ながらリモートで研修を受けることが日常的に行われるようになってきた。

また、園行事の開催が難しいここ数年間は、参観日や保護者懇談をリモートで開催することや子供の日常の園生活や園案内を動画配信するなど、創意工夫をもって保護者とのコミュニケーションや地域の子育て家庭に対する園の見える化に努めるようになってきている。

当園では、2019 年（令和元年）頃から園の ICT 化を進め、保育業務の軽減や省力化を図ってきた。当時から全スタッフを「ワンチーム」とした協働性の高揚に寄与することを目指すため、保育の記録を文字や写真で蓄積し、園内で共有することができるスマートフォン専用システムを活用した取り組みを展開してきた。

私自身が 2018 年（平成 30 年）に、本システムの開発と実証実験に携わった経緯から、今後の活用についての展望を検証し、実のある保育業務の ICT 活用を推進していきたいと考えた。

「保育シーン」は、日々の保育現場で保育者が感じた気づきを写真で撮影し、場所、時間、行動などがシーンの写真と文字ですぐに記録でき、保育者が自身の記録を振り返るだけでなく、他の保育者の記録を閲覧し共有することができる。

他の保育者と共有する事ができるという機能を最大限活用し、相互理解を深め、課題解決や研修などに活かしてきた。

ICT を活用した「保育シーン」のシステムを、保育者同士の対話や外部識者からのアドバイスを積極的に取り入れることで、園独自の文化を再認識するとともに、自園の保育力が底上げされている実感がある。

この「保育シーン」の取り組みは、第 74 回日本保育学会（富山大学）の自主シンポジウム「保育の質向上のための ICT の活用」にて報告した(2020/05/15)。

このような背景から、ICT 化により、保育の言語化、見える化を促進し、一人一人を大切にしたい教育と保育を目指し、保育の質の向上と、保育教諭同士の協働性を高めるとともに、子供を取り巻く様々な人をつなげる役割を担うものとしての活用を目指したいと考え本研究に取り組んできた。

日々の保育活動の発信と記録の共有による保育者間の協同に取り組み、蓄積されていく日々の保育シーンの記録とデータの活用により、保育教諭がお互いの保育を認めともに考え、時にはリスpektしあう姿、スーパーバイザーからのスーパーバイズやコンサルテーションによって自身の保育を省察し、次の保育への展望を描くという好循環が生まれ、保育の質が徐々に向上していくことが実証された。

「保育シーン」の活用を通して保育実践について言葉で語り合うことにより、また、他の保育施設の実践を語ったり聞いたりすることを通して、自分の価値観や子どもの見方、教育観に気付いてきた。

保育者同士の相互作用を経て、やがてそれが保育の質の向上や 保育者の専門性を高めることに繋がっていくことに期待をもち研究を進めてきたが、保育シーンを通し、個別具体的な場面について相互に語り合い、多様な意見を出し合い、すり合わせていくことから保育者同士が学び合いを深めている姿が見られた。

この他にも取り組みの中から見えてきたことはいくつかあるが、今後さらに、保育教諭同士の協働性の高揚に向けて取り組みを進めていきたいと考えている。

2022 年（令和 4 年） 7 月 22 日には、「自主公開保育・研修会」を開催した。これは、幼児期の教育の理解のために、青森県教育委員会、八戸市教育委員会をはじめ、福祉部局、幼児教育アドバイザー、近隣の保育者や小学校教諭を対象に自園の保育を公開したものである。

「保育シーン」を活用してクラスの活動を紹介した「アートセッション」や、「シンポジウム：幼児教育と小学校教育との対話」では、幼児期の教育と小学校教育への架け橋期の重要性等について、八戸市教育委員会指導主事や幼児教育アドバイザーにも登壇いただいた。

このなかで、環境を通して行われる幼児期の教育と小学校教育との連続性の解説や保育・教育の質に関する対話が広げられ、参加者の理解推進につながった。

「保育内容の改善」、「保育環境の見直し」、「保育の言語化・見える化」、「保育教諭の協働性」といった保育の質の向上のための様々な視点をテーマに保育シーンを活用しながら研究に取り組んできた。今後はさらに、保育教諭の協働性が生み出す自園の取り組みの中にある子供の発達の姿を、園に関わる様々な場や人ともに相互理解し、子どもたちの最善

の利益に資する取り組みを「子供の育ちや学びの視点」と「複層的な学びの視点」で研究していきたいと考えている。

具体的には、ICT の活用により、子どもの育ちの可視化の促進を図り、教育保育の充実を促し、保育の専門性や保育教諭の協働性・同僚性を高めることを目標に、保育シーンを用いた「保育者・保育者相互」、「スーパーバイザー」との学び合いを深めていく。また、保育シーンの投稿へのコメントは、スーパーバイズ、リフレクション等の複層的な視点からの学びが効果的に行われていくと思われる。園外からのスーパーバイズやコンサルテーションがどのように促進されているかを検証したい。

更には自治体、教育委員会、研究者や他園の保育者、児童発達支援とも交流しつつ、自園の保育を振り返る等、園全体の保育に対する思いや園独自の文化を再認識しながら自園の保育が底上げされていくことを願うものである。

当園は、園の教育保育目標の他にスタッフ目標がある。ICT 等を活用してその目標を具現化し、園のスタッフが「ワンチーム」となれることに願いをもって今後も研究を進めていきたい。

研究総括リーダー 田頭 初美

2022年度（令和4年度）文部科学省委託 幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究

研究代表総括リーダー 田 頭 初 美 学校法人 鳳明学園
認定こども園こもれびのもり幼稚園 理事長・園長

サブリーダー 金田一 美 香 認定こども園こもれびのもり幼稚園 教頭

保育の言語化・見える化、協働性研究チーム

チームリーダー 上 村 裕 樹 聖和学園短期大学 保育学科 准教授
岩 館 和歌子 認定こども園こもれびのもり幼稚園 主幹保育教諭

保育の質向上・環境構成研究チーム

チームリーダー 井 上 孝 之 岩手県立大学 社会福祉学部 准教授
岡 沼 良 子 認定こども園こもれびのもり幼稚園 主幹保育教諭

研究チームメンバー

指導保育教諭	平	悠
保育教諭	濱 道	真利子
〃	坂 口	晃 平
〃	櫛 桁	悠 希
〃	阿 部	結 衣
〃	古 山	奈津江
〃	高 坂	永 遠
〃	立 花	綾 乃
〃	鈴 木	彩 純
〃	西	可奈子
〃	山 内	奈津子
〃	石ヶ森	花 子
〃	澤 居	美 雪
〃	上 野	誠
職 員	奥 寺	浩
	太 田	桃 子

研究委員	八戸市教育委員会 教育指導課	日向端 聖
	八戸市子ども支援センター 幼児教育アドバイザー	道 合 康 子
	岩手インフォメーション・テクノロジー	阿 部 考 志
	〃	吉 田 健

研究協力	八戸市教育委員会 指導主事 竹井 亮	
	八戸市子ども支援センター 幼児教育アドバイザー	堰 合 雅 弘
	八戸市立桔梗野小学校 校長	吉 田 朝 子
	他 幼保小連携研究委員 3名	

本報告書は、文部科学省の「幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究事業」の委託費による委託業務として、学校法人鳳明学園認定こども園こもれびのもり幼稚園が実施した令和4年度幼児教育のデータ蓄積・活用に向けた調査研究事業の成果を取りまとめたものです。したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承諾が必要です。